

Title	フェミニズム以前の女性たちの主体形成 : 『婦人公論』とその愛読者たち
Author(s)	中尾, 香
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45724
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	なか お 尾 かおり 香
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 19144 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科社会学専攻
学位論文名	フェミニズム以前の女性たちの主体形成—『婦人公論』とその愛読者たち—
論文審査委員	(主査) 教授 伊藤 公雄 (副査) 教授 牟田 和恵 助教授 スコット・ノース

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ウーマンリブやフェミニズムによるラディカルなジェンダーの問い直しがなされる以前の、女性たちの主体形成のプロセスについて論じたものである。

戦後一貫して「女性解放」「女性の進歩向上」といった概念に高い感受性を表しつつつけていた『婦人公論』の愛読者たちは、いわゆる無名の女性たちのなかにおいては、もっとも「女性解放」という概念に親和的な層であると捉えることができる。そのような層の女性たちが、のちに女性解放論の文脈において高く評価されることになる「主婦論争」——1955 年代のいわゆる「第一次主婦論争」であり、『婦人公論』を舞台に闘われた論争——を、リアルタイムでどのように受容していったのか、彼女たちの受容の仕方を規定したジェンダー構造とはどのようなものであったのか、たとえ彼女たちの受容の仕方が女性解放論者の期待どおりのものでなかったにしろ、彼女たちは『婦人公論』をひとつの手がかりとして、所与のジェンダー構造のなかで——あるいはそれに働きかけることによって——どのようにして主体性を追求していかうとしていたのか、といったことを、全体を通じて論じている。

本論文は三部構成であり、各部はそれぞれ 2 章からなっている。「第一部『婦人公論』」では、まず、「第 1 章 自由主義の伝統と『婦人公論』」で、『婦人公論』についての先行研究を検討し、『婦人公論』の歴史をふりかえり、『婦人公論』を性格づけている。吉野作造を論壇に引き出すことに成功し大正デモクラシーを先導してきた『中央公論』の妹誌である『婦人公論』は、徹底したリベラリズムという思想的立場を『中央公論』と共有してはいたものの、ジェンダーにかんするオリジナルな理論はもっていなかったのではないかと、という問いがここでは発せられている。つづく「第 2 章 「主婦論争」」では、『婦人公論』の商品としての「主婦論争」という見方を前面にうちだしている。上野千鶴子によってベティ・フリーダンの『新しい女性の創造』(1963=65)と並んで評される日本の「主婦論争」であるが、じつはそれは雑誌の目玉商品として、センセーショナルリズムに満ち満ちていたものであったことを示そうとしている。

「第二部 愛読者たちの視座における『婦人公論』」は、全国に散らばる愛読者グループを訪問し、少なくとも 1950 年代前半から 66 年くらいまでの期間、熱心にグループ活動を行ってきた愛読者たちにたいしてインタビューすることによって得られた資料をもとに構成されている。まず、「第 3 章 『婦人公論』愛読者グループ」で、『婦人公論』の愛読者グループを当時の社会状況のうちに位置づけ、グループの外郭について説明している。つづく「第 4 章 生

の意味づけの装置としての『婦人公論』」では、読者たちが『婦人公論』を契機として自らの生を意味づけていくプロセスについて説明している。ここではまず、第2章で論じた「主婦論争」を当時の読者たちがどのように読んだのかという読みのプロセスを論じ、そのような読みを生じさせることになった社会的状況に言及している。さらに、当時の女性読者たちにとって、『婦人公論』を中心とする学習がアカデミズムの代替としての意味をもっていたということ、またそれは「テレビ」という他のメディアや「俳句」という他の文化活動に代替されうるものであったということも説明している。

その上で、「女性解放」と愛読者と『婦人公論』との関係について述べるために、愛読者Oさんのライフヒストリーを検討している。幼少のころから「男女平等」に感受性をもっていたOさんが、学習および自己表現への強い欲求に導かれて『婦人公論』の愛読者グループの京都支部創設にかかわり、例会や学習会をつうじて「男女平等」への欲求をさらにエンパワメントし、一方で、愛読者グループに参加することにたいして理解を示さない夫との関係を何とか対等なものにしようと夫や家族に働きかけていく。このような事例によって、『婦人公論』が無名の女性たちに「女性解放」のメッセージを確かに伝えていたという側面、さらに『婦人公論』——グループの活動も含めて——によって女性たちがエンパワメントされていくプロセスについて述べている。しかしながら一方で、のちにウーマンリブや第二波フェミニズムが提起したような問題の領域には踏み込めなかったという、当時のジェンダーの御しがたい側面についても示唆している。

「第三部 読者の生を形づくるジェンダー」では、『婦人公論』や愛読者たちの活動を規定していたジェンダーについて論じている。「第5章 編集長のジェンダー観」では、雑誌には編集長の個性および思想があらわれるという前提のもとに、『婦人公論』を創始した初代編集長嶋中雄作のジェンダー観と、「主婦論争」の仕掛け人でもありのちに『婦人公論』の黄金時代を築いた、『婦人公論』初の女性編集長である三枝佐枝子のジェンダー観について、それらが、ウーマンリブや第二波フェミニズムのラディカルさとはかなりかけ離れたものであったことを確認している。

「第6章 もう一つのジェンダー——『婦人公論』のなかの男性像——」では、『婦人公論』における男性像を調べることによって、『婦人公論』が基底として抱くジェンダーが、「甘える男性」と「母のように強くて偉い女性」の組み合わせからなるものであったことを示している。「甘える男性」という項によって、女性は必然的に一方的なケア役割を担わされることになる。しかし、そのようなケア役割を担うことは、「母のように強い」という、当時の文脈において非常に肯定的な意味に解されていた。

最後に、「おわりに」で、ミクロレベルとしてとらえられる社会的実践——愛読者たちの活動——とマクロレベルとして措定される、御しがたい構造——「読者たちの生を形づくるジェンダー」——との関係について総括を行っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本を代表する女性雑誌である『婦人公論』を対象に、文献の収集とともに、編集者や読書会メンバーなど延べ50人を超えるインタビューを通して、この雑誌の果たして来た社会的役割や読者にとってこの雑誌の果たした社会的機能をめぐって、社会学的に分析を加えたものである。本論文の特色は、文献調査や編集担当者へのインタビューにより、この雑誌をめぐる歴史的な文脈を明らかにするとともに、読書会に集う女性たちの意識を、綿密なインタビュー調査によって明らかにした点に求められる。なかでも、1950年代から60年代という、いわゆる「フェミニズム」が未だ社会的に認知される以前の時代における女性の権利や生き方をめぐって、「主婦論争」を主要な軸として考察することで、この時代の、多くは女学校や新制高校卒の女性たちの思いに含まれる、怒りや社会参加・学習への意欲とともに、心のゆらぎを含む意識の襞の部分に分け入ることで、従来の女性史やフェミニズム研究が見落としてきた部分に光を当てることに成功している。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしいものと判定した。